

### 問題の所在

現代の生活の最も奥深い問題は、圧倒的な社会の力、歴史的な遺産、外的な文化、生活技術などに直面している個人が、自分の存在の自律性と個性をなんとか保存しようという要求から来ています。原始人は自分の肉体的な生存のために自然と闘いましたが、現代ではこの闘いは新しい変貌を遂げました。一八世紀には、人間はあらゆる歴史的な束縛、たとえば、国家、宗教、道徳、経済などの分野にあったいろいろな束縛ですが、そうした束縛から自分自身を解放することが要求されました。人間の本性はもともと善良でみんな同じなのだから、それを妨げないで発達させるべきだ、というわけです。一九世紀になると、自由が増えたことに加えて、人間とその仕事の機能的な専門化が要求されました。この専門化のおかげで、ひとりの個人を他の個人と比較することができなくなり、みんながそれぞれ、可能なかぎり、なくてはならない存在となりました。がしかし、この専門化のために、各々の人間はますます他のすべての人間による補完的な活動に直接頼ることになりました。ニーチェは、冷酷無惨な闘いのなかで個人は完全に発達するのだ、と考えています。社会主義者は、個人の発達のために、いっさいの競争を抑制すべきだと信じています。それはともかく、これらの立場にはどれも同じ基本的な動機が働いています。それは、人間は社会-技術的機構による平準化と消耗に抵抗している、ということです。現代に特有の生活とその産物のもつ内面的な意味、つまり、いわば文化的カラダのもっている魂を探求するためには——これが今日大都市について私に与えられた課題なのですが——、大都市に見られるような構造が、個人の生活内容と個人を越えたところにある生活内容のあいだに立てた方程式を解かなければなりません。つまり、この問題を探求するためには、パーソナリティが外的な力に合わせてどのように自らを適応させるのか、という問題に答えなければならないのです。

### 神経的刺激の強化

都会人の個性の心理学的な基礎は、内外からの急速なたえまない刺激の変化から生まれてくる、神経的刺激の強化にあります。人間というのは、いつも区別をしている生き物です。人間の精神は、ある瞬間の印象とその直前の印象との差異によって刺激を受けています。長く続く印象、たがいにほんのちょっとしか変わらない印象、規則正しい習慣的な変化をしたり規則正しい習慣的な対照を示したりする印象——こうしたすべての印象は、いわば、急速に集まってくるイメージの変化とか、ちょっと見ただけで分かるような鋭い不連続性とか、思いがけない印象の奔流とかに比べると、あまり意識されません。後者の状態は、大都市が生み出す心理的な状態です。各自が街頭を行き交い、さまざまな経済的・職業的・社会的な生活がさまざまなテンポでなされている都市は、心理的生活の感覚的な基礎に関して、小さな町や田舎の生活と深い対照を示しています。大都市は、いつも区別している生き物である人間に、田舎の生活とは違った量の意識を要求します。田舎では生活の

リズムと感覚的な心象は、大都会に比べてずっとゆっくりと、ずっと習慣的に、ずっと静かに流れています。

### 都会人の知的性格

このことと結びつけて考えれば、都会人の精神生活の知的な性格は理解できるものになります。——深く感じられた情緒的な関係にもとづく小さな町の生活とまったく逆なわけです。小さな町の生活は、精神のもっとずっと無意識の層に根ざして、破られることのない慣習の安定したリズムのなかで、最も確実に成長します。しかし、知性の場所は、精神の、透明な、意識的な、より上の層にあります。つまり知性は、私たちの内面的な諸力のうちで一番適応力があるのです。知性は、変化に適応し、事象の対照に適応するために、衝撃を受けたり内面的な激変をこうむったりする必要はないのです。もっと保守的な精神だったら、そうした激変を通してしか、大都市の出来事のリズムに適応できないでしょう。だから、大都会の人間は——いろんな変種があることはもちろんですが——、彼を根こぎにしかねない外的環境の驚異的な流れや分裂に対して、自分自身を守るための器官を発達させるのです。都会人は心ではなく頭で反応します。この点で、意識の増大は精神的な特権だと考えられます。こうして、大都市の生活は、都会人の意識の高まりと知性の優越の基礎となるのです。大都市の現象に対する反応は、パーソナリティの深みから遠く離れた、一番敏感でない器官に移るのです。

### 貨幣経済と知性

知性はこうして大都市生活の圧倒的な力に対して主観的な生活を保存するものと考えられます。知性は、いろんな方向に枝分かれして行って、数多くの分岐した現象をまとめるものなのです。大都市はつねに貨幣経済の中心でありました。大都市では経済的交換がたくさんあって、集中しているために、交換手段が重要になります。これはわずかな交易しかない小さな町ではありえなかったことです。貨幣経済と知性の優越は本来むすびついてあります。両方ともヒトやモノに対する即物的な態度を共有しています。そして、この態度にあっては、形式的な公正は、しばしば、無慈悲な思いやりのなさにつながっているのです。知性に染まった人間は、あらゆる純粋な個別性に無関心です。なぜなら、そうしたもののからは、論理的な操作では尽くすことのできない関係や反応が起きてしまうからです。同じように、現象の個別性は、金銭的な原理にふさわしいモノではありません。貨幣はすべてに共通のものにのみ関心もちます。貨幣は交換価値を求め、あらゆる質や個別性を「いくら？」という問いに還元します。人間のあいだのあらゆる親密で情緒的な関係は、彼らの個性にもとづいていますが、合理的な関係のなかでは、人間はあたかも数であるかのように、それ自体無差別である要素であるかのように扱われます。客観的に計測可能な業績だけが関心の対象です。都会人は、売り手と買い手、家事使用人、そしてしばしば社会的交渉の義務を負う人びとに対してさえ、このような態度で接するのです。こうした知性の形態は、小さな社会の性質と対照的です。小さな社会では、個性がいやでも分かっしまい、必然的にもっと暖かい基調の行動、たんなる奉仕とお返しの差引勘定を超えた行動を生み出します。

小さな集団の経済心理の領域では、原始的な状態のもとでは生産は製品を注文する顧客

のためになされるもので、したがって生産者と消費者は知り合いである、ということが重要です。しかし、現代の大都市では、市場向けの生産、つまり生産者の現実の視野に相手の顔がけっして入ってこない、まったく見知らぬ顧客のための生産によって、物が供給されています。この匿名性のために双方の関心は無慈悲な即物的なものになるのです。双方とも知性的に計算をする経済的な利己主義者なので、義務の不履行をおそれる必要はありません。なぜなら、人格的關係には何の価値もないからです。貨幣経済は大都市を支配しています。貨幣経済は家内生産と物々交換の最後の残存物にとって代わり、日に日に、顧客注文の仕事量を減らしてきています。即物的な態度と大都市で支配的な貨幣経済との関連はあまりに明白なので、知性主義的な精神が最初にあって貨幣経済を促進したのか、あるいは逆に後者が前者を決定したのか、だれにも分かりません。ただ都市の生活様式が、この相互作用の最も肥沃な土壌であることは確実なのです。この点については、私は、イギリスの最も有名な憲政史家の意見を参照するにとどめておきましょう。彼によれば、イギリスの歴史の全過程をつうじて、ロンドンはけっしてイギリスの心として作用したのではなく、むしろしばしばイギリスの知性として、またつねに財布として作用したのだそうです。

#### 大都市の生活様式——計算可能性と時間的正確さ

生活の表面に見られるあまり重要とは思えない特性のなかにも、同じ精神的な流れが特徴的に結びついています。現代の精神はますます計算的になっています。貨幣経済がもたらした実用生活の計算上の厳密さは、自然科学の理想に対応しています。その理想とは、世界を算数の問題に換え、世界のあらゆる部分を数式を使っておさえてしまうことです。貨幣経済だけが、多くの人びとの日常生活を、秤量や計算、数の決定、質的価値の量的価値への還元などで満たしてしまいました。貨幣の計算可能性によって、新たな正確さ、同じものと違うものとのを決める場合の正確さ、同意と不同意の明瞭さなどが生活の要素間の関係に持ち込まれてきました。——ちょうどこの正確さは、外面的には懐中時計の普及によって影響を受けてきたのと同じようなものです。しかし、大都市生活の状態は、この特性の結果であると同時に原因でもあります。典型的な都会人の関係と出来事は、通常、多様で複雑であるので、約束やサービスをする場合に時間が厳守されなければ、構造全体が崩壊してどうしようもないカオスに陥ってしまうでしょう。とくに、分化した関心をもつ多数の人びとの集まりがあって、関係と活動を高度に複雑な有機体に統合しなければならない場合に、時間厳守は必要不可欠です。もし、ベルリンにあるすべての時計が、突然狂って、おかしい動き方をしたとしたら、たとえそれが一時間でも、都市のすべての経済活動と交流が長期にわたって破壊されてしまうでしょう。加えて、距離が離れているといったような、見かけ上たんなる外的な要因も、人を待たせたり約束を破ったりすることになり、大変な時間の無駄を引き起こすでしょう。だから、すべての活動と相互関係を安定した非人格的な時間割に厳密に組み込まなければ、大都市の生活技術は想像できないのです。

#### 生活形式と生活内容——生活様式の深層

しかし、ここでもこの考察全体の課題があらわれています。すなわち、存在の表層にあるいかなる点からも、——それがどれだけ表層にのみ密着しているものであるとしてもで

す——精神の深みに深くもぐり込むことになり、生活の最も平凡で外面的なこともすべて生活の意味や様式に関する究極的な決定と結局は結びついている、ということになるのです。時間厳守、計算可能性、厳密さなどは、大都会という存在物の複雑さと拡大のために、生活に強いられるのであり、それはたんに大都会の貨幣経済や知性的な性格と最も密接に結びついているというだけではないのです。これらの特性は、生活の内容をも彩り、内側から生活態度を決定しようとする非合理的で、本能的で、独立した特性や衝動を排除して、その代わりに外側から一般的で正確に図式化された生活形式を受け取ることを好むのです。たとえ非合理的な衝動によって特徴づけられている独立したタイプのパーソナリティの存在が、けっして都市で不可能ではないにしても、それらのタイプはそれでも典型的な都市生活に対立しています。ラスキンやニーチェのように大都会を熱情的に嫌う人間がいることも、こう考えると理解できます。彼らの性質は、一切のものを同じような正確さでもって定義することなどできないような、図式化できない存在のなかにのみ生活の価値を発見したのです。この大都会嫌いという同じ源泉から、貨幣経済嫌いとか、近代的人間の知性主義大嫌い、といったことが次々と出てくるわけです。

#### **歓楽に飽きた態度——その心理的源泉**

生活形式の厳密さや時間的正確さに見られるような最高度の非人格性をもつ構造に結びついているこの同じ要因が、他方では高度の人格的主観性に影響をおよぼしています。歓楽に飽きた態度ほど、大都会に無条件に保持されてきた精神的現象はおそらくないでしょう。歓楽に飽きた態度は、第一に、急速に変化しつつある、極度に圧縮された神経的刺激の結果として生まれるものです。大都会の知性も、もともとはここから出てきたものです。だから、そもそも知的に生きていない愚かな人間は、ふつう歓楽に飽きたりはしません。際限なく快楽を追い求める生活をしていると飽きてくるのです。なぜかというとなんな生活をしていると、神経は長時間、最強度の反応をかき立てられ、結局ぜんぜん反応しなくなってしまうからです。同様に、神経の変化が急速で矛盾しているために、もっと害の少ない印象でさえこのような激しい反応を強いることになり、神経があちこちでズタズタにされてしまい、神経に残っている最後の力も尽きてしまいます。それでもある人が同じ環境にずっととどまっているなら、神経は新しい力を集める余裕がなくなるのです。こうして、新しい知覚にふさわしいエネルギーでもって反応することができなくなるのです。ここから歓楽に飽きた態度が出てきます。事実それは、静かで変化の少ない環境にいる子どもたちと比べた場合に、大都会の子どもたちが示す態度なのです。

#### **歓楽に飽きた態度——その貨幣経済的源泉**

大都会の歓楽に飽きた態度の心理的な源泉は、もうひとつの源泉、つまり貨幣経済から流れ出てくる源泉と結びついています。歓楽に飽きた態度の本質は、差別に鈍感になることです。と言いましても対象を知覚していないというわけではなく、モノの意味や多様な価値、したがってモノそれ自体が実質的なものとして経験されないという意味です。歓楽に飽きた人間にとって、モノは等しく平板で灰色を基調としたものに見えます。どの対象も別のものに対してより好ましいなどということはないのです。この気分は、完全に内面化された貨幣経済の忠実な主観的反映です。貨幣は同一のやり方でいっさいの多様なもの

を等価にしてしまうので、最もおそるべき平等主義者になります。貨幣にとっていっさいのものの質的な差異は「いくら？」という言葉で表現されます。貨幣は、色もついていないし無差別なので、いっさいの価値の公分母になります。貨幣は、修復できないまでにモノの核心、その個性、その特別の価値、その比較不可能性などをえぐってしまいます。すべてのモノは、一定の速さで動いている貨幣の流れのなかでは、等しい比重で浮かびます。すべてのモノは同じ水準にあり、占める場所の大きさだけが異なっているのです。個々の場合にあっては、貨幣等価物によるモノの着色、いや脱色は気がつかないほど微細なものかもしれません。しかし、金持ちと彼が金で買いあさったモノとの関係、いやことによる現代の公衆の心性がいたるところでモノに付与する全体的な性格のために、モノをもっぱら金銭的に評価することが極めて重要になってきたのです。

### 飽きの態度と大都市

貨幣交換の中核である大都市では、もっと小さな場所よりもはるかに印象的に、モノの購買可能性が前面に押し出されます。これこそまさに都市が飽きの態度の見られる純粋な場所でもある理由なのです。都市ではヒトとモノが集中しているので、個人の神経系は最高度に刺激され、頂点に達します。同じ条件付けの要因が量的に強化されるだけで、この到達点は反対のものに転化し、飽きの態度という特別の調節になってあらわれてきます。この現象のなかで、神経は、刺激に対する反応を拒絶することで、大都市生活の内容と形式に適応する最後の可能性を見いだします。あるパーソナリティの自己保存は、客観的世界全体の価値を下落させることによってもたらされますが、この価値の下落は結局、自分自身のパーソナリティを掘り崩し、同じような無価値の感情にパーソナリティを突き落とすのです。

### 控えめな態度

この存在形式の主体は、まったく自分自身のためにこの存在形式と折り合わなければならないのですが、主体が大都市に直面して自己保存を図ろうとすれば、社会的に消極的な行動を迫られます。都会人のお互いに対するこの心的な態度は、形式的な観点からは、控えめな態度と呼んでよいのではないかと思います。小さな町では、出会う人がほとんどみんな顔見知りであり、積極的な関係を結んでいます。それと同じようにして無数の人びととのたえまない外面的な接触にいちいち内面的に反応していたら、その人の内面はバラバラになってしまい、想像できないような精神状態になってしまうでしょう。ひとつにはこうした心理学的な事実から、またひとつには都会生活の不安定な要素に直面した人間が当然もつ不信感から、われわれの示す控えめな態度は必然的なものとなります。この態度の結果、何年間も隣人の顔さえ知らなかった、などということがしばしば起こります。そして小さな町の住民の目に、われわれが冷たくて薄情な人間に映るのは、この控えめな態度のためなのです。

### 控えめな態度に隠されているもの——無関心と敵意

いや実際のところ、私の誤解でなければ、この外面的な控えめな態度の内面的な側面は、たんなる無関心ではなくて、われわれが気づいている以上に、かすかな嫌悪の情であり、

見知らぬ人だというお互いの感情であり、反感です。こうした感情は、原因は何でもよいのですが、親密な接触をしたとたんに関心を失ったり、喧嘩になったりします。このような広範な交際生活の内的組織の全体は、永続的・一時的な共感と無関心と敵意の、極端に多様化したヒエラルヒーにもとづいています。このヒエラルヒーのなかで、無関心の領域は表面にあらわれるほど大きいものではありません。われわれの精神的活動は、依然として他者のほとんどすべての印象に対して、何か独特の感情をもって反応しています。この印象の無意識の、流動的な、変化に富んだ性格は、無関心状態を結果するように思われますが、じつはこの無関心は不自然なのです。それはちょうど無差別の相互暗示が広がると耐えられなくなるのと同じです。無関心と無差別の被暗示性という大都会の典型的な2つの危険からわれわれを守ってくれるのが敵意なのです。潜在的な敵意と実際の敵対関係の予備段階は、距離感と嫌悪の情に影響をおよぼします。これがなかったら、この生活態度はぜんぜんやっていけないのです。この生活態度の程度と混合、この生活態度の出現と消滅のリズム、この生活態度が満たされる諸形式——これらすべては、狭い意味での統合動機とともに、大都市の生活様式と不可分の全体を形成します。直接的には社会的分離（Dissoziierung）に見える大都市の生活様式は、じつは、社会形成の基本形式（elementaren Sozialisierungsformen）のひとつにすぎないのです。

#### **控えめな態度に隠されているもの——大都会の人格的自由**

隠された敵意という上音をもつこの控えめな態度は、こんどは大都会のいっそう一般的な精神現象の形式あるいは覆いとしてあらわれます。つまり、大都市は他の条件のもとでは類例がないような種類と程度の人格的自由を個人にあたえます。大都市には、社会生活それ自体のたいへん発達した傾向のひとつ、近似的にはそこから普遍的な定式が発見できるようないくつかの傾向のひとつが認められます。

#### **社会形成の公式——閉鎖的な社会圏**

現代の社会構造にも歴史的な社会構造にも見いだされる社会形成の初期段階はつぎのようなものです。隣接する、見知らぬ、あるいは何らかのかたちで敵対的な社会圏に対して固く閉ざされた相対的に小さな社会圏、これです。しかし、この社会圏は緊密に凝集していて、個人成員に個性の発達や自由な自己責任にもとづく運動を許しません。政治集団や親族集団、党派や宗教組織はこうして始まります。できたばかりの組織の自己保存のためには、厳格な境界と求心的な一体性が必要です。だから、これらの組織は、個人の自由と個人の独自の内的・外的な発達を許さないのです。

#### **社会形成の公式——社会圏の拡大と個人の個性化**

この段階から社会の発達は、同時にふたつの、異なった、しかし対応した方向に進みます。集団が成長するにつれて——数のうえで、空間的に、生活に占める重要性や内容などの点での成長ですが——集団の直接的な統一は弱まり、相互の関係や結合がすすんで、最初にあった他者に対する厳しい区別は緩くなります。同時に、個人は、最初の嫉妬深い境界づけをはるかに超えた自由を獲得します。個人はまた、特殊な個性をも獲得します。拡大された集団では分業がすすみ、特殊な個性に機会と必要性があたえられるからです。国

家やキリスト教会、ギルドや政党その他無数の集団がこの公式にしたがって発達してきました。もちろん、それぞれの集団のもっている特殊な条件や力によって、この一般的な図式が修正されてきたことはいうまでもありません。

### 小さな町の場合

この図式は、大都市における個性の進化についても認められるものだと私には思われます。古代や中世の小さな町の生活は、外に向かって出ていく個人の運動や関係に対する障壁をつくり、個々人の自我の独立性や分化に対する障壁をつくりました。このような障壁があったら現代人は息が詰まってしまうでしょう。こんにちでさえ、小さな町におかれた都会人は、少なくとも似たような制限を感じています。われわれの環境を形成する社会圏が小さければ小さいほど、そして個人を境界から解き放つ他者との関係が制限されていればいるほど、それだけ社会圏は熱心に個人の業績達成と生活行為と見解を警戒しますし、逆に量的・質的な専門化が容易であればそれだけ、小さな社会圏全体の枠組みが打ち破られるでしょう。

### 古代ポリスの場合

古代の都市国家ポリスは、この点でまさに小さな町の性格をもっていたと思われます。近くや遠くの敵からの生存に対するたえまない脅威が、政治的・軍事的な厳格な統一を生み、市民に対する市民の監視を生み、個人に対する全体の嫉妬を生みました。そして個人特有の生活は、自分の家の専制君主としてふるまうことによるのみ埋め合わせられる程度にまで抑圧されました。恐るべき扇動と興奮は、アテナイ人の生活に特有の多彩さを添えています。それはことによると、小さな町に生じている、個人化を許さない、たえまない、内外の圧力に対する、比類なく個人化されたパーソナリティの闘い、という事実として理解できるかもしれません。この事実は、弱い個人が抑圧され、強い個人が最も情熱的な方法で自らを証明するように刺激されるという緊張した雰囲気を生み出しました。これこそまさに、人類の知的な発展のなかで、アテナイにおいて「一般的な人間的性格」と、厳密な定義はさておき、われわれが呼ばなければならないものが開花した理由です。

### 社会圏の拡大と個人の自由

というのは、つぎのような関連性には歴史的妥当性があるだけでなく、事実に妥当性もあるからです。つまり、最も広範で、最も一般的な生活内容と形式は、最も個人的な生活内容・形式と密接に関連しているということです。両者には共通の準備段階があります。すなわち、両者は狭い構成体や集団のなかに敵を見つけます。この構成体と集団を維持するために、外部にある広がりや一般性に対し、また内部にいる個人の自由な移動に対し、自らを防衛状態におくのです。封建時代がそうであったように、「自由な」人間は国法、つまり最大の社会的活動範囲における法のもとにおかれます。そして不自由民は自分の権利を封建組織のもっと狭い社会圏から引き出し、より広い社会的活動の範囲からは排斥されているのです。——だからこんにち、都会人は、小さな町の住民を取り囲んでいる度量の狭さや偏見とは対照的に、高尚で洗練された意味で「自由」です。それは、大都会の最も込み合った群集のなかにいるときくらい、大きな社会圏にみられるお互い同士の控えめ

な態度や無関心や知的な生活条件が個人の独立性に強い影響をおよぼすものであることを、個人に強く感じさせることはほかにないからです。それは、身体的な近さと空間の狭さが、精神的な距離をいっそう分かりやすくするからなのです。ある環境のもとでは、大都会の群集のなかにいるときほどには孤独感と喪失感を感じないのは、明らかにこの自由の裏面にすぎません。というのは、他の場合と同様、この場合でも、人間の自由は情緒的生活の快適さをけっして必然的に反映するものではないからです。

### 大都会の拡大と個人の自由

大都会が自由の場であるのは、社会圏の拡大と人格の内的・外的な自由との普遍的・歴史的相関関係によるわけですから、たんに直接的な地域の規模と人間の数だけによるものではありません。ある都市をコスモポリタニズムの中心地に行っているのは、むしろこの目に見える広がりを超えたところにあるのです。都市の地平は、富の発展に比すべき方式で拡大します。一定の量の財産は、半ば自動的に、いっそう急速に増加します。一定の限界を超えるやいなや、市民の経済的・人的・知的関係、つまり都市の後背地に対する知的優越の領域は幾何級数的に増大します。動的拡大から得られる利得は、それと同等の拡大ではなく、新しいより大きな拡大のための一段階となります。都市から紡ぎ出される一本一本の糸から、あたかも自己増殖するかのようにさらに新しい糸が育ちます。それはちょうど、都市の内部で地代の不労利得が、たんに交通の増加によって地主に自動的にますます多くの利潤をもたらすのと同じことです。

この点で、生活の量的な側面は、直接的に質的な特性に変換されます。小さな町の生活領域は、主として、独立した自給自足的なものです。大都市にとって決定的な特徴は、内的な生活が、遠く離れた全国的あるいは国際的な領域に波を打って流れ出ていく点にあります。これに反し、ワイマールはこの事例ではありません。その意義は個人のパーソナリティに依存し、これとともに消滅したからです。ところが、大都市の真の特徴は、最も卓越した個人のパーソナリティからさえ本質的に独立していることです。このことは、独立の半面であり、個人が大都市で享受する独立に支払う代価なのです。

大都市の最も重要な特徴は、その物理的な境界を超えて機能的に広がっていることです。そしてその効力はひるがえって、大都市生活に重みと重要性和責任を与えるのです。人間は身体の境界内にとどまるものでも、直接的な活動の範囲内にとどまるものでもありません。むしろある人格の範囲は、時間的・空間的に、彼らから放射する効果の総体によって構成されるのです。同様に、都市もその直接的な範囲を超えた効果の総体から成り立っています。この範囲だけが、都市の存在が表現される実際の範囲なのです。

この事実から、このような拡大の論理的・歴史的補完物である個人の自由が、たんに移動が自由であるとか偏見や狭い俗物根性がないとかいう消極的な意味だけでは理解できないことが、明らかになります。本質的な点は、究極的にはすべての人間が持っている特殊性や比較不能性は、生活様式があつてようやく表れるものであるということです。われわれがわれわれ自身の本性の法則にしたがっていること——これは結局のところ自由ということなのですが——は、この本性の表れが、他者の本性の表れと異なる場合にのみ、明らかになり、われわれおよび他者に確信できるものとなるのです。われわれの紛れのなさだけが、われわれの生活様式が他者によって押しつけられたものではないことを証明してい



ます。

### **分業の発達と専門化**

都市は、なによりもまず、最高度に発達した経済的分業の中心地です。都市は、分業の発達によって、パリの14番目役という有償の職業のように、極端な現象を生みだします。14番目役というのは、住居に人に分かるように看板がかかっている、晚餐の時刻に正装をして準備しており、晚餐会の人数が13人になりそうなときに、すぐに呼び出しに応じられるようにしている人のことです。都市は、拡大するにつれて、ますます分業のための決定的な条件を準備します。都市は、規模の大きさのゆえに、著しく多様なサービスを吸収できるような社会圏を準備します。同時に、個人が集中し、顧客をめぐる競争が激しいので、個人は、簡単に他者によって置き換えることができないような機能の専門化を余儀なくされます。

### **競争と専門化**

決定的なことは、都市生活が、生活の糧を得るための自然との闘いを、利潤を得るための人間同士の闘いに変化させたことです。ここでは、利潤は自然からではなく、他者によって与えられるのです。専門化は、ここで明らかにした源泉から出てくるばかりではなく、もっと深い源泉からも出てきます。つまり、売り手は顧客につねに新しい独特のニーズを喚起しなければならないということです。尽きることのない収入の源泉を見つけ、容易に置き換えられないような機能を見つけるために、その人のサービスを専門化する必要があるのです。この過程は、公衆のニーズの分化、洗練化、豊富化をうながしますし、これは明らかに、公衆の内部にますます個人的な相違を引き起こすに違いないのです。

### **精神的な個性化——都市的パーソナリティ**

そしてこのために、心的な態度は、固有の意味での精神的な個性化へと向かっていきますが、都市の規模が大きければ大きいほど、個性化への誘因は増すのです。この過程の基礎には一連の明白な要因があります。まず、ひとは、大都市生活の諸次元の内部で、自分自身のパーソナリティを主張する困難に出会います。価値とエネルギーの量的な増大が限界に達すると、ひとは、なんとか差異に対する敏感さを刺激して、社会圏の関心を自分のほうに引きつけようと、質的な特性に手を出します。最後に、ひとは、最も特有の傾向、つまりわざとらしさ、気まぐれ、気取りなど、大都市に特徴的な勝手気ままな傾向を採用しようという誘惑にかられます。いまや、こうした勝手気ままのもつ意味は、こうした行動の内容にあるのでは全然なく、「違っている」という形式、変わったやり方をして目立つことでひとの関心を引きつけようというその形式にあるのです。さまざまな性格の人にとって、自分自身にわずかな自尊心とある位置を占めているという意識を残す最後のただひとつの手段は、他者を意識するという間接的なものです。同じように、見かけ上重要ではないように見えるけれども、累積的な効果がなお認められるある要因が働いています。小さな町における社会的交渉と比べた場合、都会人は人と人との接触が短く少ないことです。交際が頻繁で長いために、他者の目に自分自身のパーソナリティがはっきりとしたイメージをもって確実に映し出されるような雰囲気の中にある個人よりも、接触の短い大

都市の個人のほうが、「要を得て」いて、集中的で、特徴的に見えるようにしようという誘惑がずっと強いのです。

### 個性化の原因——客観的文化の優越

しかし、大都市が最も個人的な人格的存在を希求する衝動を生み出す最も深い理由は——それが正当でうまくいくかどうかは別として——、つぎのことにあるように私には思われます。近代文化の発達、言ってみれば「主観的精神」に対する「客観的精神」の優越によって特徴づけられます。つまり、法だけでなく言語にも、芸術だけでなく生産技術にも、なじみ深い環境の対象だけでなく科学にも、精神の総体が体现されているということです。個人の知的な発達は、この精神の成長に不完全にしかついていくことができず、両者の距離はどんどん離れていってしまいます。たとえば、過去百年間にモノや知識や制度や慰安のなかに体现されてきた巨大な文化を一望し、これらいっさいを同じ期間における個人の——少なくとも上流身分の——文化的進歩と比較した場合に、両者のあいだには成長のおそるべき不均衡が明白となります。いやそれどころか、いくつかの点では、個人の文化の精神性やデリカシーや理想主義が退化していることに気がつくのです。この乖離は、本質的には分業の発達の結果です。なぜなら、分業は個人に一面的な完成を要求し、一面的な追求が最大限に発達すると、しばしば個人のパーソナリティの欠乏をもたらすからです。いずれにしても、個人は、ますます客観的な文化の成長に対処できなくなります。個人は、おそらく意識以上に実践において、またこの実践からくる曖昧な情緒の状態の総体において、とるに足らない量に還元されます。個人は、物質と力の巨大な組織のたんなる歯車にすぎなくなり、この組織は個人の手から進歩と精神性と価値をひき剥がし、それらを主観的な形式から純粹に客観的な生活形式に転換させるのです。

### 客観的文化の舞台としての大都市

必要なのは、大都市はパーソナリティをこえて大きく成長してしまったあらゆる文化の本来の舞台である、と指摘することだけです。大都市では、建物や教育制度、空間を征服する技術の驚異や快適さ、共同生活の構成体、国家の可視的な制度などがあって、そこではパーソナリティがいわば自らを維持できないような、結晶化され非人格化された精神が圧倒的に満ち溢れています。一方では、生活はパーソナリティにとって際限なく楽です。というのは、刺激や関心や、時間や意識の用途があらゆる方面から個人に提供されているからです。それらは個人をあたかも流れのなかにいるかのように運び、個人は自分で泳ぐことなどほとんど必要ないのです。しかしながら、他方では、生活はますますこれらの非人格的な内容と提供物から構成され、純粹に個人的な色彩と比較不能性は置き換えられる傾向にあります。この結果、個人は、自己の最も人格的な核を保存するために、個人の独自性と特殊性を際限まで呼び起こさなければなりません。個人は、自分自身にさえ聞き取れるようにするために、人格的な要素を誇張しなければならないのです。客観的文化の肥大化による個人文化の退化は、最も極端な個人主義の伝道者、とりわけニーチェが、大都市に対して激しい嫌悪をいだく理由なのです。しかしこれは、実際のところ、これらの伝道者があれほど情熱的に大都市で愛され、都会人にとって満たされない熱望の予言者・救世主としてたちあわられている理由でもあるのです。

### 普遍的個人と個性的個人の闘争の場としての大都市

大都市の量的な関係によって育まれた個人主義の二つの形態——個人の独立と個性の彫琢のことですが——の歴史的な位置を問うならば、大都市は精神の世界史においてまったく新しい地位を占めています。一八世紀には、個人は、すでに無意味になった抑圧的な束縛のなかに見いだされました。——政治的・農村的・ギルド的・宗教的性格をもった束縛です。これらは、いわば、人間に不自然な形態と時代遅れの不正な不平等を強いるような拘束でした。この状況で、自由と平等への叫びがわき起こり、いっさいの社会的・知的関係における個人の移動の自由が信条となりました。自由はただちに万人に共通の高貴な本質を前面に押し出すことになっていました。この本質は自然が万人に賦与したもので、社会と歴史がこれを歪めていたにすぎなかった、ということになったからです。この一八世紀の自由主義の理想とは別に、一九世紀になると、一方ではゲーテやロマン主義によって、他方では経済的分業によって、別の理想がわき起こりました。歴史的な束縛から解放された個人は、いまやお互いを区別することを望んでいるというわけです。人間の価値を担うのは、もはや万人に共通の「普遍的な人間存在」などではなく、人間の質的な独自性や置き換え不能性だということです。われわれの時代の内的・外的な歴史は、社会全体のなかで個人の役割を定義するこの二つの方法をめぐる闘争とめまぐるしく変わる紛糾の道を歩んできました。

この両者の闘争と和解の舞台を提供するのが大都市の機能です。なぜなら大都市は、人間に役割をわりあてるこれら二つの方向へ発展するための機会と刺激を、われわれの前に示す特有の条件をそなえているからです。それに加えてこれらの条件は、精神的な存在の発達にとって計り知れない意味をふくんだ、独特の位置を獲得しています。大都市は、生活を取りまく対立した流れが、たがいに同等の権利で結びつくだけでなく、それぞれ花開くような偉大な歴史的構成体として己の姿を現すのです。しかしながら、この過程において、生活の流れは——その個々の現象に共感をもって触れようと、反感をもって触れようと——、裁判官の態度でもってのぞむことがふさわしいような領域を完全に越えているのです。このような生活の力は、成長して根を張り、歴史的な生活全体の頂点にまで達して、浮動的な存在であるわれわれは細胞として、部分として属しているにすぎないわけですから、——われわれの課題は告発したり許したりすることではなく、ただ理解することだけなのです\*。

\*この講演の内容は、その性格上、参照できる文献からひきだされたものではない。その文化史的な趣旨に関する根拠と詳述については、拙著『貨幣の哲学』にある。

\* \* \*

[解説] 原テキストは、Georg Simmel, "Die Grossstädte und das Geistesleben" 1903 (*Brücke und Tür*, 1957, SS.227-242) であるが、このほかに以下の5つの翻訳がある。

① "The Metropolis and Mental Life," 1951 (Hatt and Reiss eds. *Cities and Society*. Pp.635-646) org. Kurt H. Wolff, *The Sociology of Georg Simmel*, 1950, Free Press.

② 「大都市と精神生活」居安正訳、1976 (『橋と扉』ジンメル著作集 12 白水社)。

③「大都市と心的生活」松本通晴訳（鈴木広編『都市化の社会学』誠信書房）、1978年。

④「大都会と精神生活」川村二郎編訳『ジンメル・エッセイ集』平凡社、1999年。

⑤"The Metropolis and Mental Life." In Donald N. Levine ed. *Georg Simmel: On Individuality and Social Forms*. org. E. Shils trans. In *Social Sciences III Selections and Selected Readings*, vol.2, 14th. University of Chicago. 1948.

①はたいへんこなれた英訳である。ここでは、この英訳に準拠して訳出し、日本語として意味が通らなかったり、明らかに誤訳と思われる箇所について、原テキストを参照した。また、段落の区切りが原テキストと異なっているので、拙訳では原テキストにしたがって区切り直し、読者の便を考えて小見出しをつけた。

②は、独文の原テキストから直接翻訳したものである。独文に忠実な訳であるので、原テキストと対照しながら読むには最適であるが、残念ながら日本語としては読みにくい。

③は、①の英文からの翻訳と思われるが、誤訳が多く、意味の通らない箇所が散見される。

④は、文学系の柔らかい訳であるが、社会学にとってのキーワードが砕かれてしまっていて、あまり参考にならない。